



## 野球場の救急

【執筆】中尾 篤典  
(岡山大学大学院 医歯薬学総合研究科 救命救急・災害医学講座 教授)

私は野球が大好きです。子供のころプロ野球の試合に連れて行ってもらって感激したことをいまでもよく覚えています。医学部に入った後も野球に没頭し、毎年夏に開催される西日本医科学生総合体育大会に向けて猛練習を重ねる毎日を送りました。新型コロナ感染症流行の影響で、大会も3年連続で中止となるなど、医学生の運動部活動に暗い影を落としているのは残念です。

子供たちの“野球離れ”がいわれるようになって久しいのですが、それでも日本で野球はいまだに人気スポーツです。



### 野球場からの救急搬送

昭和の時代の球場ではファン同士のケンカもよく見られたものです。酔った観客の下品なヤジも球場の風物詩の1つでしたが、最近の観客

は礼儀正しくなり、過度に非常識なファンの姿は少なくなりました。

酔ってケガをするファンもいます。以前、私は甲子園球場近くの大学病院に勤務していましたが、べろんべろんに泥酔した観客がスタンドの通路から転落し、かなり大きな外傷を負って搬送されてきたこともありました。

実は球場におけるアルコールに関連する事案は大きな問題をはらんでいます。米国では、メジャーリーグ球場のすべてでアルコール飲料の購入量に上限が定められています。販売する場所も規制され、一定のインングでは販売を中止するという対策も取られています。

メジャーリーグの球場内の応急診療所には看護師、医師、救急救命士のいずれかあるいは、それらすべての職種が常駐しており、それら医療従事者の全員が心肺蘇生訓練を受けています。また75%の球場では試合中は救急車がもしものときに備えて待機しています。そうした万全の体制を取っているにもかかわらず、1992年から93年にかけての1年間に68%の球場で少なくとも1.1人以上の死亡事案が起きています<sup>1)</sup>。

日本では、2003年に明治神宮球場を対象に行われた研究報告があります。この年のシーズンでは67試合（ナイトゲーム60試合）が行われ、約160万人の観客が来場しています。そのなかで球場の応急診療所を受診したのは247人でした。つまり1試合につき3.7人、約6400人の観客に対して1人の割合になります。その半数が内因性疾患が原因であり、胃腸症状、低血糖、頭痛が多かったそうです。四肢外傷の頻度も高く、外傷は試合が始まる前か終了間際に多かったと報告されています。ちなみにこの年にセリーグで優勝したのは阪神タイガースでした。また1996年から2003年の8年間では救急搬送された観客は57人にのぼりました。ファールボールなどのボールが直接あたったのケガが約7割、次いで観客席で躓いたり、踏み外して転倒したりした外傷が多かったと報告されています<sup>2)</sup>。

メジャーリーグの球場は、日本と比べて選手と観客の距離が近く、ボールを遮るネットも少ないか低いことから、迫力がありますが、一方で打球によるケガも多いのではないかと推察されます。

メジャーリーグにおける2005年から2016年までの12年間にファールボ-

サノフィ e-MR

医療関係者向け情報サイト



 中尾 篤典先生、こんばんは。

すケースもあったようです。迫力を求めるファンの希望には根強いものがあり、なかなか安全第一とはいかないようです<sup>3)</sup>。



## 球場でバットを配るなんて！

メジャーリーグではファンサービスの一環として、来場者に対していろいろなグッズの配布が行われています。グッズというと、首を振る選手の人形などが有名ですが、ニューヨークのヤンキー・スタジアムでは、“バット・デー”と称し、球場に足を運んだファンに合計25,000本の木製バットを配るイベントが開催されています。

しかし、野球のバットは凶器として犯罪に使用されることも多く、ニューヨークの救急医たちはこのイベントに異議を唱えました。

というのもニューヨーク州の近隣にあるメリーランド州ボルチモアでは1990年1月から1991年7月までの19カ月の間に、75人がバットによるケガで外傷センターに搬送されていました。死亡例もあり、26%に遷延する頭蓋内出血が認められるなど、バットは比較的頻繁に使用される武器としても認識されています<sup>4)</sup>。

ペンシルバニア州フィラデルフィアからも同様の報告が寄せられています。1989年1月から1990年12月の2年間に74人の患者がバットによる外傷が原因で入院し、患者の9割に薬物依存が認められました。7%は救急手術を必要とし、4%には重篤な後遺症が残ったと報告されています<sup>5)</sup>。

イギリスなどヨーロッパでは野球というスポーツが行われることは滅多にないのですが、2006年1月～5月にかけて20件のバットによる外傷が報告されました。

そのほとんどが酒に酔った男性によるもので、発生日時も週末に集中していました。対人口比ではアメリカよりもスコットランドのグラスゴーの方が多かったようです<sup>6)</sup>。

話をもとに戻しましょう。ニューヨークでバットを配った後に外傷件数が増えるかどうか調べたところ、バットで受傷した77人のうち、バット・デー以前の10日間のバットによる外傷受診は38人(49%)でしたが、バット・デーの後の10日間では36人(47%)で変わらなかったそうです。被害者の年齢や性別、重症度にもバット・デーの前後で差はなく、結論としてバット・デーはバットによる外傷者を増やさないことが明らかになりました。

その結果を報告した論文では「なぜバット・デーとニューヨークの外傷件数が関係しなかったのか」についていくつかの考察もなされています。そこでは、多くの観客がニューヨークの外から来ていることやもともと非常に事件の多い地域であり高々25,000本のバットという武器が増えたところで大勢には影響しないといった論考がなされています<sup>7)</sup>。

ともあれ、野球は清く正しいものであってほしいと、野球を愛する私は  
思います。

## 文献

1. Ma OJ, Pirrallo RG, Rubin JM. Survey of medical services at major league baseball stadiums. Prehosp Disaster Med. 1995;10(4):268-71;
2. Ishikawa H, Hori S, Aikawa N. The incidence of sickness/trauma in spectators of professional baseball at the Meiji Jingu Baseball Stadium. Keio J Med 2007, 56 :85 – 91.
3. Milsten A, Bradley WF, Hill M, Sacco W, Henes M. Foul Ball Rates and Injuries at Major League Baseball Games: A Retrospective Analysis of Data from Three Stadiums. Prehosp Disaster Med. 2022 Mar 11:1-7.
4. Groleau GA, et al. Baseball bat assault injuries. J Trauma. 1993; 34(3):366-72
5. Berlet AC, et al. The baseball bat: a popular mechanism of urban injury. J Trauma. 1992;33(2):167-70.
6. Lightbody CJ, et al. The baseball bat: a modern day cudgel. Emerg Med J. 2007;24(2):112.
7. Bernstein SL, Rennie WP, Alagappan K. Impact of Yankee Stadium Bat Day on blunt trauma in northern New York City. Ann Emerg Med. 1994;23(3):555-9

[> 記事一覧に戻る](#)